

巻頭言

人間は生きものであることの再認識

中村 桂子 (JT 生命誌研究館 館長)

私の専門は生命誌 (Biohistory)。「人間は生きものであり、自然の一部である」というあたりまえのことを基本に置く生き方を考え、さまざまな提案をしています。

人間は生きものだなんて、幼稚園の子どもでも知っているあたりまえのことです。でも、今の社会は、それを基本にしてつくられてはいません。進歩・成長を求め、大切にされる価値は「便利」です。便利は、速く効率よくできること、手が抜けること、思い通りにできることをさし、これを科学技術が生み出した機械が支えます。徒歩から始まった東海道の旅が新幹線で移動するまでになった歴史を考えれば、便利のありがたさがわかります。

ただここに問題があります。生きるということ、過程であり、手をかけることに意味があり、しかも思い通りにならないところがたくさんあるものです。つまり「便利」とは相容れません。私たちが生きものであり、食べものも生きものであることを考えると、食べものに関しては、「便利」だけで考えてはいけないという答が出てきます。現代社会はそこを忘れて、食べものに関わる農業、食品産業、調理などを「便利」の中で考えてきたのではないのでしょうか。食品を商品としてだけ見て、高い生産性、経済性だけで考えてきたように思います。

「人間は生きものである」「食べものも生きものである」というあたりまえのことに眼を向けませんかという呼びかけは、現代社会を根本から考え直すという大変なこと

につながるのです。出発点は、食べものは自分が暮らす土地でその土地に合ったものよさを充分生かしてつくり、食べるシステムをつくることとあります。これも本来あたりまえのことですが、今それがとても難しくなっていることは誰もが認めることでしょう。21世紀ですから、複雑な気象の動きにAIで対応するとか、ゲノム編集を生かして扱いやすく、美味しい、栄養価の高い品種をつくるなど、科学技術の活用はできます。大事なのは「便利さ」だけを求めて、人間も食べものも機械ではないというあたりまえのことを忘れないことです。科学技術が悪者なのではなく、私たちの考え方が生きものから離れ、効率や経済性だけから事を判断してしまうところに問題があるのです。ここを考え直すこと。食品と科学技術についての課題です。

AIとゲノム編集という技術は、私たち人間に大きな判断を求めています。効率性、経済性だけを求めてこの技術を使っていくのか。あくまでも「人間は生きものである」ということを基本に、効率でなく過程を大切にし、子どもや作物などの生きものに手をかけることに喜びを見出す生き方をよしとしたうえで、これらの技術と向き合うのか。選択の時です。長い間生きもの研究をしてきた者としてそう思わざるを得ません。政治・経済は前者で動いています。生活者である私たちが考え、動くしかありません。科学技術に振り回されず、それを使いこなす生きものである人間として生きることを選びたいならば。